

福島報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 嶋 原 理
編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

今こそ「子どもを主語」にした授業改革を

福島市教育委員会教育長 佐藤 秀美

昨年12月25日、中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問され、学習指導要領改訂の議論が本格的にスタートした。主な審議事項として4点挙げられているが、諮問文の冒頭には、人口減少・少子高齢化、グローバル化、自然災害の激甚化、デジタル技術の発展、変化の激化と不確実性の高まり、人生100年時代の到来とマルチステージの人生モデルへの転換など、これからの我が国を担う子どもたちは、激しい変化が止まることのない時代を生きることになると記されている。そして、次のような視点が重要であるとも述べられている。

- ・生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けること
- ・多様な他者と当事者意識を持って対話し、問題発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育てること
- ・全ての子どもが多様で豊かな可能性を開花できるようにすること
- ・調和と協調を重視する日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図ること

私たち教育に携わる者は、子どもたちの「今」を大切にしたい教育を行っている。と同時に、子どもたちが生きる「未来」の社会を見据えた教育を行う責務も担っている。つまり、「今」も「未来」も大切にしたい教育である。しかし、現状はどうだろう。発言のほとんどが教師でそれを大人しく聞く子ども……といった一方通行の画一的な授業も散見される。一見落ち着いて見える子どもの頭は、本当にフル回転しているのだろうか。こうした一斉画一の授業は、標準偏差のグラフを思い描いていただくと分かりやすい。どうしても中央の山の層、いわゆる平均層に焦点を当てざるを得ず、上位層には簡単すぎる一方、下位層はついていけないという状況を生みやすい。

では、どうするか。「子どもを主語にする」ことを大切にしたい。前述した授業は、いわば「教師が主語」の授業である。「子どもは無知で、言われなければやらない。自ら学ぶことはできない。」という認識を改め、「全ての子どもは学びたがっている。全ての子どもは有能で、適切な環境を整えれば必ず自立した学習者になれる。」という前提に立つ。今、求められているのは、ほしいものを何でも与えてくれる、しかも分かりやすく与えてくれる教師ではなく、子どもの主体性や自主性を喚起し、自立した学習者に育てる教師ではないだろうか。つまり、子ども観・教育観のアップデートであり、「先生に教えてもらう授業」から「自分で学びとっていく授業」への転換である。学習課題は共通であっても、自分でとことん追究する、端末を活用して調べる、友達と協力して学ぶ、先生に教えてもらうなど、学び方を自ら選択・決定する場を大切にしたい。決めることには責任が伴う。まさに自分自身が学びの主体となることを意味する。もちろん、発達段階や教科・単元の特性を踏まえるとともに、二項対立の思考に陥らないことが前提だ。次期学習指導要領を待つまでもなく、授業改革は「今」必要なのだ。

諮問文には次の一文がある。「世界に冠たる我が国の初等中等教育は、質の高い教師の努力と熱意に支えられ、大きな成果を上げ続けています。」授業改革の必要条件である働き方改革を進めつつ、現在進行形で書かれているこの一文が未来においてもこう言い切れるよう、教育委員会はもちろんのこと、学校の最高責任者であり、教育行政の最前線の指揮官である校長先生方には、そのリーダーシップを存分に発揮していただきたい。

「レジリエンスのある子を育てる」

福島市立水保小学校長 嶋原 浩之

「キャリア教育をベースとし、子どもたちの自己実現に向けて“チャレンジする”学校を創ることで、子どもや教職員が安心して“チャレンジできる”学校となることを目指すこととする。」これは、学校経営方針において、キャリア教育をベースに教育活動を展開していくことを謳った一文です。基礎的・汎用的能力と折れない心を育成すべく、今年度の具体的方針として「学級経営：ありたい学級・なりたい学級を目指して!」「生活指導：ATARIMAEを自分事に!」「学習指導：自律的な学びへのチャレンジ!」「三者連携：水保っ子の育ちを繋ぐネット・ワーク!」という4つの柱に取り組んできました。以下に2つの実践を紹介します。

「生活指導：ATARIMAEを自分事に!」とは、毎月の生活目標を教師から提示するのではなく、児童会代表委員会において自分たちの生活を見つめ、今取り組むべきことを決定し実践します。少しずつ実態に合ったあての設定になり、自分たちの生活を自分たちでつくる空気が感じられるようになりました。

「学習指導：自律的な学びへのチャレンジ!」とは、学んでいること（内容知・方法知・自分知）の価値を子ども自身が実感する授業を目指すものであり、自己調整学習の具現に向けて取り組んでいます。家庭学習における自己選択・自己決定も考慮しながら、自己マネジメント力の育成にも併せて取り組んできました。

子どもの自主性・主体性を大切にしてきた想定外の成果としては、児童の自発的な「ライブ活動」が見られました。全校対象の「ダンスパフォーマンス」「お笑いライブ」や、2年男児による6年生への感謝の「お笑いライブ」などです。こうした子どもたちの変容には、「譲り・委ね・許し」「焦らず・比べず・諦めず」という、子どもの成長を願う本校教職員の基本的なスタンスがあったからこそと考えています。

自己実現へのチャレンジには、様々な障害や挫折がつきものです。それらを恐れてチャレンジせずに流されるのではなく、失敗からも学びがあり成長できることを実感できる子どもを育てたいと願った3年間でした。

「飯野小中一貫校としての取組について」

福島市立飯野小学校長 佐藤 育男

本校は飯野中学校との小中一貫のコミュニティースクールとして学校運営協議会が設置されています。協議会では地域の様々な立場の方々が参加して、9年間を見通した学校教育の在り方や子どもたちの将来を見据えた教育について、熱心な話し合いが行われています。併せて、委員の方々が授業を参観したり学校行事をご覧いただいたりする機会も積極的に設けています。毎回、学校運営についてのご意見や地域における子どもたちの現状等について多くのお話をいただけるので、大変貴重な機会となっています。そして、これらの学校訪問や学校評価内容等を踏まえて、委員の方々から運営方針についてご承認をいただき、小中一貫教育を進めています。

小中職員間のつながりも大きな特色です。全教職員が生徒指導、学力向上、特別支援教育、養護教諭、幼保小の各部会にわかれ、定期的に意見を交わしています。そして、学習・生活のきまりの共通理解、地域学校保健委員会、現職教育互見授業、学校訪問相互参観、出前授業、メディアコントロール週間、合同講演会の実施など、目指すべき飯野の子どもの姿を共有した上での取組を数多く行っています。併せて、スポーツ交流、合同奉仕作業、合同授業などを通して、児童生徒同士の交流も積極的に行っています。さらに、今年度からは教科部会を設置し、教科ごとのつながりを意識した取組も検討し始めました。ちなみに、1月に開催した情報交換会では、次年度の新たな取組として小学生の陸上競技大会に向けての練習に、中学生がアドバイザーとして参加するなどのアイデアが出されました。このように、校種や立場を越えて新たな取組に挑戦しようとする先生方のエネルギーが小中一貫教育を大きく発展させています。学校間の距離だけではなく、職員の心の距離が近いからこそ様々なアイデアが生まれてきているのだと思っております。これからも飯野町に夢と希望を与える小中一貫校として発展し続けることができるよう、小中学校職員が共に手を取り合い一丸となって「飯野っ子」の教育に取り組んでいきます。

方部だより

東方部の活動紹介

東方部長 熊谷 賀久（鎌田小）

東方部は、福島市立10校と福島大学附属小学校の合わせて11校で構成されています。方部研修会や方部会での情報交換が相談できる機会となっており、今まで働き方改革やICTの活用、AIドリルの使用、行事の持ち方等の話題が挙げられ、各校の取組を紹介したり、お互いの考えや意見を交流させたりなど、活動してきました。話し合いから学校経営に生かせる内容や問題への対応に参考になる意見が出され、大いに役立っています。

研究では本年度から「教職員の高い危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり」に取り組むこと

となり、1年次の取組として、学校危機管理マニュアルチェックリストを使つての危機意識や危機対応能力に関する自校の課題把握と各校での具体的な実践を発表しての意見交換を行いました。各校の実践で参考になる取組が共有されるとともに、協議を通して、危機対応に活用できる危機管理マニュアルや学校安全計画等の見直し、教職員の危機意識を高める働きかけの工夫、チームとしての危機管理体制の構築等の課題が出されました。

次年度も情報交換を大切にするとともに、研究では各校の実態に応じた危機管理等に関する取組の見直しを図り、実践での成果を共有して研修を深め、組織的に対応できる安心・安全な学校経営を目指したいと思います。

実・湧・満・彩(みわくまんさい)の信陵・飯坂方部 信陵・飯坂方部長 ハ巻 博之(笹谷小)

信陵・飯坂方部は、飯坂線や国道、高速道路が縦横に走る交通の結節点にあり、温泉や果樹園などの観光資源も豊富で、実・湧・満・彩の福島らしさにあふれた地域です。近年の統廃合で学校数は減りましたが、北沢又、大笹生、笹谷、飯坂、平野、湯野の6校が、地域のカラーを生かし、特色ある教育活動を展開しています。

学校経営上の課題は多様で、校長の悩みは尽きることがありません。そんなとき、胸襟を開いて話し合い、よりよい解決に向けての示唆を与えてくださる経験豊富な校長先生の存在は大変頼りになります。方部研修会では、学力向上や不登校対策、保護者対応、働き方改革など、多方面で情報を交換し、自校化に役立てています。特に今年は、「子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進」の視点で、教職員の意識改革や授業のUD化など、6校が共同で進めてきた実践の成果を、東北連小研究協議会弘前大会において発表しました。各校が足並みを揃えるためには、校長のリーダーシップが大切であり、指導性を高める上で貴重な共同研究となりました。

この地域は、商業・交通・観光などの利便性のよさから定住率が高いそうです。こうした地域の魅力に愛着をもつ子どもを育てるために、校長自らが、実・湧・満・彩の地域の魅力を存分に味わいたいと思います。

西方部の活動紹介

西方部長 佐藤 栄治(佐原小)

わたしたちの小学校は、JR福島駅周辺から西方面に吾妻山麓までと広く位置しています。立地する環境も、市街地、郊外、山麓部と異なり、学校規模もかなり違います。そんな差異がある中でも、今年度は「V教育課題 10社会との連携・協働 2学びと成長の連続性を重視した学校段階等間の接続・連携の推進」について共同研究を進めてきました。令和7年度の安達大会を見据えて、各校が接続する学校間等との取組について情報を提供し、その内容について議論も重ねてきました。この過程では、研究推進担当を中心に福島市小学校全体の状況調査も実施し、その分析結果と考察も取り入れています。年度末においては、小中接続によるリーダー・イン・ミーの実践例、校長間連携の実践例、幼・保接続の実践例と3つの実践を集約し、支会発表の準備をしっかりと整えています。また、共同研究のほかに学校経営上の課題について内容の濃い話し合いもできました。危機管理に直結する話題では、校長としての対応の在り方について考え合うこともできたと思います。

令和6・7年度の研究副主題の冒頭に「福島に誇りをもち 多様な他者と協働しながら」という言葉があります。まさしく相似形のごとく、誇りをもち協働しながら活動できた西方部です。

専門部活動紹介

本地区生徒指導の状況と今後の方向性 ～ 県生徒指導部のアンケート調査結果から～

福島地区生徒指導部長 星 秀文(荒井小)

県小学校長会生徒指導部でのアンケート調査について、福島地区の主な結果、状況と今後の生徒指導の方向性を確認したいと思います。

【調査A】子どもたちの心のケア

- SCは75% (前年比+1.9P) の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は82.8回 (前年比+17.1P) となっている。SSWは45% (前年比-3.1P) の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は3.1回 (前年比-3.6P) となっている。SC、SSWはその約7割が、児童の心のケアや不登校に係る対応に効果的に活用されている。

【調査B】不登校、いじめ等

- 不登校児童は年々増加している。また、前年度から不登校が継続している児童数が増加している。一方、いじめの認知件数は42件(前年比-41)と減少している。今後も親和的な学級づくりをはじめ、各校の不登校・いじめ防止についての指導が重要である。

【調査C】ネット・SNS利用の実態

○ ネット・SNSを利用している児童は、84%（前年比+3.9P）であった。自分専用の端末を持っている児童は58.1%（前年比-3.1P）、ネット・SNSに関するトラブルがあったという児童は4.5%（前年比-0.4P）と減少している。また、端末にフィルタリング機能が付いている児童は利用者の43.3%であった。

以上を踏まえ、今後の生徒指導について校長として次の対応が求められると考えられます。

- ① 新たな不登校を出さないための取組や、不登校児童に対しての居場所づくり、SC・SSWを活用し、各関係機関と連携する等、多面的・多角的な対応に心がけること。
- ② 今後も「いじめは現に起きている」という危機感をもって、早期からの対応ができる校内体制を構築しておくこと。
- ③ ネット・SNSの賢い使い方について、児童への指導とともに保護者への啓発の機会を設定し、家庭と学校が協力して対応していくこと。

今年度の活動を振り返って

福島地区行財政部長 穂山 俊之（鳥川小）

今年度の福島地区小学校長会行財政部は、人事の反省や要望活動の根拠となる調査研究、さらには、学校の働き方改革に関するニーズ研修を実施し、各学校の課題解決の一助となるよう活動を推進してきました。以下に調査や要望等の概要をお示しします。

【令和6年度人事の反省】

- 優秀な人材を確保するための採用の在り方
- 管理職の働き方改革及び処遇改善
- 効果的な特別支援教育が実施可能となる人的環境の充実

【行財政調査Ⅰ 教職員配置等調査】

- 復興推進加配をはじめとした加配措置の継続
- 教育相談充実のためのSCやSSWの切目のない長期派遣

【行財政調査Ⅱ 教育施策実施状況調査】

- 学力向上や不登校対応に大いに効果がある少人数教育の継続
- ICT環境の整備及びICT支援員の増員
- 特別支援学級の編制基準の見直しと環境整備の充実

【特別調査 大震災・原子力災害や感染症の影響調査】

- 「教職員働き方改革アクションプラン」の具現化に向けた教員業務支援員の継続配置と勤務時間の延長

【行財政部ニーズ研修会】

- 「働き方改革で教育の質を高める」というテーマでの外部講師による講話や先進校の実践事例の共有化

行財政部の活動は地区中学校長会や県小学校長会と連携しながら進めています。今後も各校長先生方の学校経営に寄与することができるよう努めてまいりますので、引き続き行財政部の活動へのご協力をお願いします。

役職定年となる会員の皆様のご紹介

◇ 令和6年度末で役職定年をお迎えになる会員の皆様をご紹介します。

| | |
|-------------------------|-----------------------|
| 鳴原 理 校長先生（福島市立福島第一小学校） | 平久井 淳 校長先生（福島市立清水小学校） |
| 大内 伸一 校長先生（福島市立福島第二小学校） | 古田 幸裕 校長先生（福島市立岡山小学校） |
| 齋藤 雅敏 校長先生（福島市立福島第三小学校） | 熊谷 賀久 校長先生（福島市立鎌田小学校） |
| 石幡 良子 校長先生（福島市立福島第四小学校） | 八巻 博之 校長先生（福島市立笹谷小学校） |
| 阿部 貴史 校長先生（福島市立渡利小学校） | 赤間 聡 校長先生（福島市立立子山小学校） |
| 栗城 敏彦 校長先生（福島市立南向台小学校） | 佐藤 栄治 校長先生（福島市立佐原小学校） |
| 小松 浩行 校長先生（福島市立杉妻小学校） | 渡邊 裕樹 校長先生（福島市立平野小学校） |
| 石井 隆博 校長先生（福島市立蓬萊小学校） | 荒川 修 校長先生（福島市立大森小学校） |

※ 学校番号順のご紹介とさせていただきます。

いつもあたたかく私たち後輩会員を支え、導いてくださいました16名の校長先生方、本当にありがとうございました。これからもそれぞれのお立場からのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

— 編 集 後 記 —

情熱のある学校経営の一端、子どもたちや地域を見据えた各方部、専門部の取組から、目指すべき学校の姿、あるべき校長の姿を学ばせていただきました。

公私ともにご多用の中、快く寄稿いただきました校長先生方に、心から御礼を申し上げます。

福島市立瀬上小学校長 高橋 哲也